

# 請負工事 の証拠

民事関係ケーススタディ  
紙芝居

## 法律問題マンガ教材



こちらは、Aさんです。

Aさんは、とある建設会社の課長として、  
毎日を一生懸命がんばっていました。

そして、とある現場でのやりとりの場面です。



こちらは、元請け会社の担当者であるBさんです。

『あー、どうも、Aさん、おつかれさます。

Aさん、すいません、相談したいことがありまして、実は、うちの会社、もうこの現場での予算を使い切っちゃってるんですけど、お客さんの関係で、追加工事しなきゃいけないんですよ。

それで、すみません、次の仕事でかならず、恩返ししますので、Aさん、すみません、追加工事、無料でやってもらえませんか？』



『え、ええー！！無料で追加工事ですか。

いやー、それはちょっと、むずかしいですよ。

うちだって、この現場、ほとんどトントンかちょっと赤字ですけど、Bさんとのお付き合いもあると思ってがんばってる現場ですから』



『そこをなんとかどうか、どうかお願いします。Aさん。なんとか、ここで追加工事しておさめないと、わたしの立場もやばいんですよ。

今後、Aさんにお仕事出せなくなっちゃうかもしれませんし』



『え、ええー！！そんなー。マジですか、こまったなあ』



『Aさん、お願いしますよ。わかりました、じゃあ、次お願いする現場は、いつもの2倍で発注しますから。どうか、どうか、このとおりです』



『え、ええー！うーん、わかりました。わかりましたよ。じゃあ、追加工事、無料でやりますよ』



『ありがとうございます。Aさん、ホントありがとうございます』

# 無料

こうして、Aさんは、追加工事を無料で行いました。

そして、それからまた次の現場でのやりとりの様子です。



『Aさん、おつかれさまです。 先日の追加工事、本当にたすかりました。ありがとうございました。』

あ、そうだ、前回の借りがあるから、今回の新しい現場は、いつもの2倍で、発注するって約束してましたね。そうだった、そうだった。じゃあ、えーと、この現場は、通常だと500万円の工事になるから、じゃあ、2倍で1000万円ですね』

# 1 0 0 0 万円

『おおー！1000万円で発注してもらえますか。』

ありがとうございます。がんばります』

# 5 0 0 万円

しかし、それから、工事が完成したのち、Bさんの会社から、Aさんの会社には、1 0 0 0万円ではなく5 0 0万円が振り込まれました。

おかしいと思ったAさんは、Bさんに電話をしてみました。

プルルルル



『もしもし、あ、いつもお世話になっております。私、Aと申しますが、Bさんはいらっしゃいますか？』



『Bのほうは、転勤になりました』



『え、ええー！！そうだったのですか。知らなかったです。わかりました。』

えっと、先日、ご入金いただいた工事代金なのですが、5 0 0万円ではなくて、1 0 0 0万円という約束をしたのですが』



『あの一、そういったご契約はないと思われ  
ますが。』

通常、500万円をお願いしている工事  
ですので、通常価格をお支払いしております』



『え、ええー！！いえいえ、ちゃんと、Bさん  
との間で、1000万円という約束をしました  
たので、工事を実施したんですよ』



『あの一、それでしたら、正式な契約書か何か  
あるのですか？』



『いえ、契約書とかはありません。口頭ではあ  
りますが、ちゃんとBさんと約束しました。』

Bさんに聞いてもらえればわかりますので、  
Bさんに代わってもらえますか？』



『あのですね、Bのほうは、遠方に転勤になりました、本件は私が引き継いでおります。

Bに確認したところ、そういった約束は特にはないとのことでしたので。

これ以上お話することはありません。

失礼いたします。ガチャ』



『え、ええー！そ、そんなぁ。ひどいよ。そりゃないよー。

困ったなぁ。いったい、どうしたらいいんだろうか』

# 専門家

『そうだ、ちょっと、専門家の先生に、聞いてみよう』

こうして、Aさんは、こういった件に詳しい専門家の先生に相談することにしました。



こちらがその専門家の先生です。

『こんにちは、今日はどうされましたか？』

このとき、Aさんは専門家の先生に事情を説明しました。

# 受注額 が争点

## 立証

## 立証責任

## 言った 言わない

『うーん、なるほど、そういうご事情だったのですね。まず、契約書がなくても、理論上、契約は成立します。そして、今回、契約があったこと自体は先方も認めていますね。そのため、500万円を支払ってきました。』

そして、争いがあるのは、受注した金額で、これが、500万円なのか1000万円なのかという点ですよね。受注額が争点になっていますね』

『これについては、お互いの話し合いで解決ができず、裁判等になった場合は、最終的には、お金を請求する側である、Aさんのほうで、「立証」というものをしなければならないのです。立証というのは、簡単に言えば、証拠を提出して、裁判官を納得させなければならないということです。』

それができなければ、1000万円という契約があったとは認定してもらえず、Aさんの請求が認めてもらえないことになります』

『これを立証責任と言います。そして、本件では、契約書がないということですね。契約書がなくても、注文書とか、覚書とかほかの書類や、書類以外でも証拠になることがあります。ただ、本件ではそういったものは一切ないということなので、ほかに、受注金額が1000万円であることを示すものとしては』

『Aさんのお言葉、供述ということになりますが、これは逆に先方はそれを否定してくると予想されますので、言った言わないの話しになってしまいがちですので、それだけだと、なかなか、普段の倍の金額の1000万円の受注があったと、裁判官を納得させるのは難しいと思われます』





『え、ええー！！そうなんですね。くやしいです。わかりました。今回は良い勉強になりました』

それから、またある日のことです。  
とある現場でのやりとりの様子です。



こちらは、また別の工事現場の元請け会社の担当者のCさんです。

『Aさん、おつかれさまです。  
Aさんの工事の技術は本当にすごいですね。  
いつもスピードが速いですし、クオリティも高いですよ、いつもありがとうございます』

## 追加工事

『ところで、Aさん、すみません、お客さんの希望で、追加工事が必要になりまして、  
この追加工事図面のとおりにお願いしたいんです』



『あー、この図面どおりに追加工事ですね。わかりました。  
これだと、追加工事代金300万円になりますが、大丈夫ですか？』





『あー、たぶん、大丈夫だと思います。確認しておきます。

で、すみません、納期が迫っているので、もう今日から追加工事、始めてもらえますか？』



『え、あの、追加工事についての契約書とか発注書とか、先にもらえないんですか？』



『あー、契約書ですか。うーん、なんかそういうのって、ボクよくわからないんですけど、

いろんな人に見てもらって、確認してもらって、いろんな人にハンコもらったりして、すごい時間かかっちゃいそうなイメージなんですよね。それだともう間に合わないかもしれないので、先に始めちゃってもらえませんか？』



『えー、うーん、じゃあ、せめて、この追加工事の図面に、うちの会社宛てで、追加工事代金300万円で追加工事を依頼しますって、書いて、日付と社名も書いて、ハンコ押してもらってきてもらえませんか？』



『あー、それならすぐできそうですね。わかりました、いま、行ってきますんで、もう工事始めてもらえますか？』

『わかりました。じゃあもう始めておきますね』

## 追加工事代金 振り込まれない

それから、しばらくしてからのことです。Aさんは、追加工事代金300万円が振り込まれなかったことから、Cさんの会社に電話をかけました。

プルルルル



『もしもし、あ、いつもお世話になっております。私、Aと申しますが、Cさんはいらっしゃいますか？』



『担当のCは、退職しました』



『え、ええー！！そうだったのですか。知らなかったです。わかりました。』

えっと、先日、追加工事を実施した件について、300万円がまだお支払いいただけてないのですが』



『あの一、そういった追加工事のご契約はないと認識しております。』

Cからは、すべてお支払い完了との報告を受けておりますので。

もう未払いなどはないと認識しております』



『え、ええー！！いえいえ、ちゃんと、Cさんに頼まれて、急ぎと言われて仕方なく、追加工事は300万円でやりますよという約束をして、追加工事を実施したんですよ』



『当社では、すべてのお支払いについて、契約書がないかぎりお支払いできないシステムになっております』



『え、ええー！そ、そんなぁ！！』

困ったAさんは、また専門家の先生のところに相談にいきました。

そして、事情を話して相談しました。

すると、専門家の先生はこう答えました。

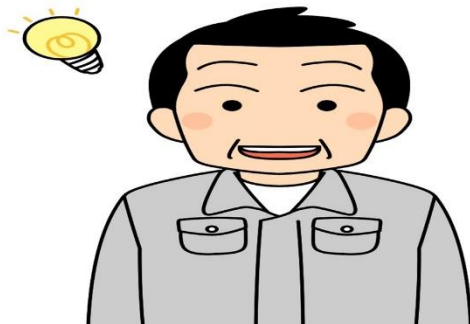


『Aさん、前回、ご説明したとおり、こういったお金の請求をする場合、お互いの話し合いで解決できず、裁判等になった場合には、お金を請求する側で、どんな契約・合意をしたのか、ということを立証していく必要があります』

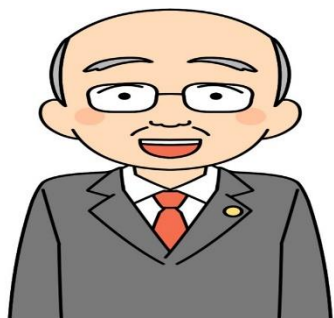


『あー、そうですね。それが、今回も、契約書をもらえなかったんですよね。』

こまったなー』



『あ、そうだ、契約書はないんですけど、追加工事の図面に、ウチの会社に、300万円で追加工事を依頼するということを、書いてもらったんですけど、これはどうですか？』



# 交渉



『おお！！それは証拠として使えるかもしれませんよ。以前にもお伝えしたとおり、必ずしも契約書がなければいけないというわけではないので、契約・約束があったことを立証できればよいので、契約書以外でも、注文書とか、覚書とかでも、立証できることがあります。あとは、メールとか会話の録音とかも、もしかしたら、うまく活用できることもあるかもしれません。』

そして、今回は、追加工事の図面とのことですので、これならどの部分の工事なのかということも書かれていますし、先方担当者の直筆の文章もありますし、日付もありますし、会社の印鑑も押されていますので、もし裁判になった場合、これをもとに、300万円の追加工事の合意があったことを、認定してもらえるかもしれませんね

それに、もしかしたら、これを材料に相手方の会社と交渉すれば、相手方の会社としても、裁判になった場合を見越して、支払ってくれる可能性もあるかもしれません』

『おお、そうなのですね。ありがとうございます。それでしたら、これを見せて、さっそくまずは交渉してみようと思います。ありがとうございます。がんばります』

### <参考>

請負工事の工事代金の支払いをめぐってトラブルになる物語を、マンガ形式でご紹介しました。

もちろん最終的な結論は、ケースバイケースであり、裁判になってみないとわからないケースが多いですが、一つのモデル事例として、想定され得る事例をお伝えしました。

実際に類似のケースに遭遇した場合は、ケースバイケースですので、慎重な対応、専門家への早期相談等を推奨しております（この物語は制作時点の情報になりますので最新の法改正、判例変更にご注意下さい）。